

陸機史傳體文學研究

王, 昊聰

<https://hdl.handle.net/2324/4495987>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏名	王 昊聰			
論文名	陸機史傳體文學研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	静永 健
	副査	九州大学	講師	井口 千雪
	副査	九州大学	准教授	中島 楽章
	副査	九州大学	准教授	藤井 倫明

論文審査の結果の要旨

本論文の提出者王昊聰（以下、提出者と称す）が取り組んだものは、中国三世紀の文人陸機（261～303）の文学作品についての研究である。従来、陸機と言えば、その詩歌（「赴洛道中作二首」「擬古詩十二首」「樂府十七首」など）や、辞賦（「文賦」が特に有名）が取り上げられ、その文学史上の意義などが議論されることが多い、また三国呉の名将陸遜（183～245）の孫として紹介されることが多く、すでに滅亡した国の遺臣の子弟であるとの見方が、後世の我々にも色濃く作用し続けている部分があるようにも思われる。しかし提出者の本論文では、これまで分析の俎上に乗せられることが稀であった実用的散文群（これを提出者は「史伝体文学」と名付けている）に着目し、これらの作品を丹念に読み込むことによって、その文学創作の背景や、作品を享受していた当時の西晋王朝の宮廷社会をもう一度しっかりと把握しようとしたことが評価される。つまり、本論文によって、ようやく「西晋の文人」としての陸機の創作活動や、その文学史上の意義が見出されたと言える。

まず本論文第一章は「晋書限断論」（晋王朝の歴史は何時を起点に書き始めるか）という、文学研究とは少し距離のある問題から考察が始まる。陸機は、三十代になって晴れて西晋の都洛陽に上り、幸いにも推薦者を得て朝廷への出仕が叶ったのだが、やがてその西晋王朝において、その文筆の才能を遺憾なく発揮し、王朝の歴史編纂作業において重要な任務を担っていたのである。陸機のさまざまな実用的散文が執筆されていったのは、実にこのような背景があったのである。

続く第二章では、三国魏の曹操（155～220）への追悼文「弔魏武帝文」が取り上げられる。従来この文章については、陸機の曹操に対する批判や貶斥の意が込められているのではないかと、との解釈があった。しかし提出者の分析結果によれば、「弔文」の伝統に従って、陸機は可能な限り事実在即した著述を心がけており、曹操については、武将としての功績だけでなく、部下をいたわる人間的な優しさについて、その「遺令」（生前の曹操が発した命令書）を紹介することで、後世に伝えようとしていることが判明した。

第三章に取り上げる「漢高祖功臣頌」では、これが皇太子教育の教材として用いられていたことが突き止められた。実は西晋王朝では、数々の政治的内紛によって、皇太子が正式に立てられる例が少なかったのだが、唯一「皇太子」として存在したのが、第二代恵帝の長子司馬適（278～300、諡は愍懐太子）であった。陸機は一時期、この皇太子の教育係として「太子洗馬」の職にあり、「漢高祖功臣頌」は、まさしく司馬適のために執筆されたことが提出者の考証によって明らかとなった。

第四章に取り上げる「演連珠五十首」は、上奏文などに用いられる文例集であるが、これも、提出者の調査によって、新たに官僚を登用する際の「策問」（試験問題）などに応用されている例が判

明した。三十代の陸機が西晋王朝で新たに見出した生きる希望こそが、文学の創作であり、しかもそれは、伝統的な辞賦や詩歌のみならず、このような実用的な文章の執筆からも見出されることは、本論文の新しい発見であり、今後の陸機研究および六朝文学研究に大きな刺激を与える研究成果と言える。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものと認めるものである。